

私のデイトレード手法紹介(1)

徳山 秀樹

1. はじめに

レポートではまず現在運用の主力としている独自のデイトレード理論（以下、徳山式トレード）について 2 回に分けて解説したい。専業トレーダーを 6 年以上続けてきたノウハウが詰め込まれており、同じ志を持つ方の参考になればと考える。但し、かなり割り切った大胆な手法で、すべての人に受け入れられるものとは考えていないので了承願いたい。

2. 徳山式デイトレードのバックグラウンド

5/5 付 S-1 MAX CLUB ブログからの続きとなるが、それまで突っ込みからのリバウンド狙いで短期スイングトレードを中心にしてきた私がデイトレードに傾注するようになったのは、(1)毎日少なくとも確実に利益を得たい、(2)限られた投資資金を有効活用したい、という二つの理由が大きい。これらを満足するシンプルなルールに基づくデイトレード理論を手にしたことで、曖昧さの残る理論に基づいたそれまでのスイングトレードを徐々に追いやっていったという図式である。

まず(1)毎日少なくとも確実に利益を得たいという点は、実際に専業トレーダー生活を始めてから強く感じるようになっていた。スイングトレードでは実際に利益が出るのは最後に手仕舞いを終えてからである。それまではどんなに含み益が膨らんでいたとしても、それを確定するまでは不安感が拭えない。もちろん、すべてがうまくいくわけでもなく損失に終わるトレードもあるので、先行きは常に不透明だった。さらに専業化後も日経平均株価は下げ止まらずついに 1 万円を割り込んで底が見えない相場状況ということもあったが、カラ売りもせずリバウンド狙い中心の短期トレードは常に恐怖心との闘いであり、それなりの成果をあげていたものの精神的に楽ではなかった。

次に(2)限られた投資資金を有効活用したいという点は、(1)とも絡んで小資本トレーダーの悲願である。デイトレード以外の時間軸の投資では、取引時間外における外部環境の激変といった計算外の動きに備えて余裕を持った資金管理が必須である。特に信用取引で想定外の動きが発生すると、レバレッジ効果で含み損が拡大して保証金が不足して追証が発生してしまう。そうした事態を避けるためにも、資金枠を目一杯使うことは通常しない。とはいえ小資本トレーダーが少ない資金を分割して非常用の資金を確保しては効率が悪い。だがデイトレードに特化すれば、投入した投資資金は必ずその日のうちに回収するので、非常用資金をキープせず大胆に投入可能と考えた。これを毎日繰り返していれば資金効率は抜群で、まさに限られた資金を最大限有効に活用できる手段と考えた。

こうした理由で習得を目指したデイトレードであるが、実はもともと苦手意識が強くてしばらくは全然うまくいかなかった。特に苦しんだのが「時間軸の違い」である。スイングトレードであれば、仕込んだその日の終値で必ずしも含み益になっているとは限らない。仮に当時のルールで仕込んだ日の終値で強制的に決済したとしたら、使い物にならなかった。デイトレードではそれをプラスにしなければならないのだから、よほどいいタイミングで仕込まなければならないと考えられるが、そのためにはエントリー条件を厳しくしなければならず、トレード機会の減少につながる。しかもその日に決済するのだから利益率は当然低下してしまい、トレード回数・利益率ともにダウンするのでは話にならない。

そうした状況で転機となったのが、ちょうど4年前になるのだが、絶好のタイミングで仕掛けるという発想を転換して、シンプルな条件で幅広く仕掛けるという方針を思いついたことである。それが次に説明する「多銘柄同時仕掛け方式」という独自のデイトレード理論である。

3. 徳山式デイトレード最大のポイント

もともとのスイングトレードもそのルールに曖昧さはあったものの、月単位では安定した成績を確保していた。だが徳山式デイトレードの最大の特徴である「多銘柄同時仕掛け方式」は、この安定性を日単位にも持ち込もうと考えたものである。1日に1銘柄から数銘柄程度のトレードであれば、うまくいく日もうまくいかない日もあって日々の損益は安定しないが、月間では安定した利益となるのが一般的であろう。その常識を打ち破ってトレード数を大幅に増やすことで勝率・利益を日単位でも安定させることに成功した。

一般的なデイトレードの特徴は、株価を動かす大きな材料が出たか、もしくは仕手人気化して値上がり（値下がり）ランキングの上位に入ってくるような銘柄を対象にする。それは短期間で大きく動くことを期待しているからであり、こうした銘柄は人気化するために通常の何倍もの出来高に膨らんで株価も乱高下する。そういった激しい動きのなかで、デイトレーダーたちは飛び乗りと飛び降りを繰り返して値ザヤを稼いでいく。この手法はうまくいけば短時間で大きな利益をあげることが可能だが、その反面、期待と反対方向に動くのもあつという間で、それによって大きな損失を被るリスクも潜んでいる。それは瞬時の判断力という投資家の「狩猟感覚とセンス」に委ねられているのである。

一方、徳山式デイトレードは一般のデイトレードとは反対に、あまり動かない銘柄を1日に数多く手掛けるのが特徴である。シンプルなルールで機械的に多数エントリーして、全体相場の動向を見ながら決済していく方法で、わずかな利益もしくは損失で終わる地味

で退屈なトレードが大半なのであるが、なかにはいい感じで利益を伸ばしていく銘柄があるので、それを見つけて大事に育てていくという「農耕的な」考え方である。

その手法はデイトレードには珍しい逆張りである。朝の早い時間帯（9:10 から 9:20 まで）にあらかじめ選んでおいた安定した動き・出来高を続ける銘柄からピックアップするのである。そこで次に対象銘柄の選び方について説明する。

4. トレード対象銘柄

一般的なデイトレードで人気の派手な動きをする銘柄が集まるのが、東証マザーズ、大証ヘラクレス、ジャスダックといった新興市場であり、こうした市場の人気銘柄には前述の通り多くのデイトレーダーが群がって、連日のように激しいバトルを繰り返している。まさに弱肉強食の厳しい世界で、勝ち組が短期間で大儲けしているのに対して、それよりはるかに多い負け組が大敗して市場から退場させられているのが現実であろう。徳山式デイトレードでは、こうしたマーケットは最初から投資対象として除外しており、それらに比べて比較的値動きの小さい東証1部上場銘柄をターゲットにしている。退屈・臆病と思われるかもしれないが、安全第一なのである。

徳山式デイトレードの第一ステップは、こうして東証1部銘柄に限定することである。東証1部に上場している銘柄は、日経平均やTOPIXなどの株価指標にある程度連動して動くが、これらの指標は東証1部銘柄の一部（日経平均）または全部（TOPIX）を使って計算されるのだから当然である。2部市場や新興市場は、これらの指数の算出には直接関係なく、指数に引っ張られずに独自の動きをする恐れがあるので対象外とする。人気化した銘柄はもちろん、人気がない銘柄になると出来高ゼロの日があるような極端なものもあって非常に扱いづらく、安定した動きの銘柄を見つけるのは困難という理由もある。

次にこの東証1部銘柄のなかで最近の1日あたり出来高が安定して10-20万株程度で推移している銘柄に絞り込む。この出来高水準を重視しているのが特徴であるが、その理由は出来高が少なすぎると流動性の問題があって、板の間隔が開いて思うように売り買いできないからであり、逆に出来高が多いと人気化して指数の動きに影響されずに独自の動きとなることを恐れている。但しこの基準はあくまで目安であって、この段階であまり厳密に絞り込むことはしていない。こうしてピックアップされた銘柄から実際にトレード対象銘柄を決めていくのだが、具体的なエントリーおよびイグジットポイントについては次回のレポートで解説することとしたい。

1. はじめに

前回のレポートでは、非常に割り切った独自のデイトレード手法として開発した徳山式トレードについて、その特徴と対象銘柄絞り込みまでのプロセスを中心に解説したが、2回目の今回は具体的なエントリーおよびイグジットポイントについて解説する。難しくはないが全銘柄にくまなく適用できるような万能ルールではなく、前回の説明によって絞り込んだ銘柄のみをトレード対象とするので注意願いたい。

2. 徳山式トレードのエントリーポイント

徳山式トレードのエントリーポイントの特徴は、朝の 9:10-9:20 の間に多くの銘柄にエントリーする点である（多銘柄同時仕掛け方式）。これは私のこれまでの投資経験から得られたことだが、朝の早い時間帯はちょっとした売りや買いによって大きく株価が変動することがあって、明らかに「行き過ぎて」いるケースがある。こうした銘柄に逆張りでエントリーして行き過ぎの修正を狙うのが基本である。東証の取引開始は9時だが、最初の10分間は何が起こるか分からないので、この時間帯は様子見として全体指標の出足の動き方をウォッチして、次の10分で実際にエントリーしていく。

9時の取引開始後10分を経過すると、監視銘柄も殆どの銘柄が寄り付いているはずなので、それらのリアルタイム株価を確認していく。そのときの抽出の目安となるのが、株価が前日の終値と比べて「±2%以上乖離」しているということである。安定性でリストアップしている銘柄が、朝の早い時間帯に材料もなくこれだけ前日の終値から乖離していることは「行き過ぎ」と考え、普通ならスタート地点である前日の終値に向かって株価が修正されると考えて、それを狙って逆張りで仕掛けていくことになる。

つまり値動き・出来高が安定性からリストアップした銘柄群の中から前日比2%下がったら「買い建て」、2%上がったら「売り建て」というのが大原則となる。ここで大切なのは、相場動向に左右されず確実に利益を得るためには、買い建てと売り建てを両方実施することが必須という点である。ただ実際にはなかなかこの条件を満たす銘柄がない日もあって、そうした場合には多少条件を緩和して±2%に満たない上げ・下げでもエントリーすることで、買いと売りのバランスをとることがしばしば必要となる。

できるだけ多くの銘柄にエントリーするというのはリスク分散の目的であるが、ベースにあるのは「下手な鉄砲も数打ちゃ当たる」という発想で、シンプルな条件を満たすだけ

でありあまり深く考えずにエントリーした銘柄のなかにも少しくらい「掘り出し物」が含まれているだろうという期待感である。効率性を重視する一点集中型とは正反対の考え方だろう。こうして信用取引を利用して売り建て・買い建てのバランスをとるようにするが、その目的は全体相場指標としての日経平均が日中どう動いても利益を得るためである。そしてエントリーした銘柄は、後述するように全体相場の動きに応じて不利な銘柄を先に手仕舞って、有利な銘柄を残して利益を伸ばすというイグジット方針をとっていく。

3. 徳山式トレードのイグジットポイント

ここでは前述のエントリー銘柄のイグジットに関して、買い建て・売り建てに分けて説明する。まず安い銘柄を買い建てたトレードの場合、その後の展開として考えられるのは、(1)日経平均が上昇してそれに伴い、行き過ぎ修正のエネルギーとあわせて力強く上昇する場合、(2)日経平均がもみ合い、行き過ぎ修正のエネルギーだけで緩やかに上昇する場合、(3)日経平均が下落し、行き過ぎ修正のエネルギーを打ち消して株価が上昇しない場合、となる。それぞれの利益率目標を(1)2%、(2)1%、(3)0%と考えているが、実際には日経平均の動きを見ながら決済するタイミングを判断するようにするのが安全である。また想定外の動きによって含み損が一定水準に達したら迷わずロスカットするようにする。

次に高い銘柄を売り建てたトレードの場合、その後の展開として考えられるのは、(1)日経平均が下落してそれに伴い、行き過ぎ修正のエネルギーとあわせて急落する場合、(2)日経平均がもみ合い、行き過ぎ修正のエネルギーだけで緩やかに下落する場合、(3)日経平均が上昇し、行き過ぎ修正のエネルギーを打ち消して株価が下落しない場合、となる。それぞれの利益率目標を(1)2%、(2)1%、(3)0%と考えているが、実際には日経平均の動きを見ながら買い戻すタイミングを判断するようにするのが安全である。またこれも想定外の動きによって含み損が一定水準に達したら迷わずロスカットするようにする。

徳山式トレードの対象銘柄は、東証1部銘柄に限定しているが、東証1部に上場している銘柄は原則として日経平均やTOPIXなどの株価指標にある程度連動して動く。つまり日経平均やTOPIXの動向を把握して利益確定のタイミングを調節していくことで安全性が増す。全体相場の動向を把握するには、日経平均先物やTOPIX先物の分足チャートを観察している。そしてエントリーした銘柄をイグジットしていくタイミングは、前日の引けから当日朝までの材料を消化して、相場が落ち着いて本格的にその日の動きを開始する9時半以降が適当と考える。その時間から本格的に日経平均先物の分足チャートで全体相場の方向性を見定めて、イグジットする銘柄の優先順位を決める。

もちろん完璧にそれを読みこなす必要はない。先物の動きが完璧に理解できるのなら先